

イラン地震災害派遣国際緊急援助隊の 経験と言葉

自治省消防庁特殊災害室長
小林 恭一

あれは、平成2年6月21日夜のことだった。課内で政令改正の打ち上げの小宴を行っていたところに、外務省から、イランで発生した地震についての情報をもたらされた。内容は、被害が極めて大きいため各国が救助隊の派遣の準備を始めており、日本政府も「国際緊急援助隊」の派遣を検討している、というものであった。

この情報が届けられた時、その場で、国際救助隊が派遣されれば消防チームも参加すること、その責任者は私になることが決められてしまった。先ほどまでの一杯機嫌はどこかに吹っ飛び、半信半疑のまま帰宅すると、深夜になって「派遣決定」の連絡が入った。そして、翌日にはオレンジの救助服に身を固め、警察チーム、医療チームなど総勢22人の国際救助隊の一員として、イランに向けて飛び立つことになったのである。

イラン派遣国際緊急援助隊の一員として書きたい思い出は数多くあるが、誌面の都合もあるので、「言葉」に関係のあることについて3つほど記しておきたい。

一つは、このような場合の「情報」の重

要性である。救助隊としては、イランのどこでどのような被害が発生しているのか、どのような救助・救援のニーズがあるのか、ということが最も知りたいことであるし、そこへ行く手段、宿泊場所、水、食料、ガソリン、トラック等の調達の可能性、治安や衛生状態の状況などの基礎的な情報も知っておかなければ動きがとれない。一方、イラン側に対しては、日本の援助チームの人員構成、装備、救助隊として可能な活動内容などを提示して、我々の活動エリアを早急に決めてもらわなければならない。活動エリアの決定が遅くなくても、活動エリアの決定が適切でなくても、「救助活動→医療活動→救命」という今回の緊急援助隊の役割は果たせなくなってしまうからである。

このような情報交換と行動決定の場面は、テヘランから現地対策本部のある州都ラシュトに飛ぶ際にも、ラシュトから被災地の中心であるマンジールに入る際にも、マンジールから山岳地帯の被災地ピルクに移動する際にも必要になった。情報交換と行動決定については、テヘランでは日本の大使館に、ラシュト以降はテヘランから随行し

てきてくれた大使館のメンバーにお世話になったが、とにかく言葉が通じなくては、救助隊の精鋭部隊も活躍のしようがない、というのが正直なところである。情報交換に用いる言葉は、首都や州都では英語でもなんとかなるが、被災地に近づくほど英語は通じなくなり、ペルシャ語でなければ情報交換ができなくなる。

本格的に救助活動をしたピルクでも、結局、対象建物や活動内容の決定、現地調達したパワーシャベルの運転など、ペルシャ語の通訳として随行してきてくれた大使館員の活躍なくしては、救助隊も全く活動できなかったと言っても過言ではない。まさに言葉は力だということを実感したところである。

2つ目は、山岳地帯を踏破する際に行動をともにしてくれた「イラン革命建設隊」に所属する護衛兵や運転手との共同作業の際の印象である。テントの設営や荷物の積み降ろしなど、彼らと簡単な共同作業を行う場面は何度かあったのだが、英語ではほとんど意志疎通ができない。そういう場合に最も通じるのは、結局我々は日本語、彼らはペルシャ語で、勝手に話すことだった。「その柱を持っていて！」などというのは、状況と手まねとそれぞれの言葉のミックスで十分通じる。変に英語に頼ろうとすると、イキイキした表情がなくなるのでますます通じないし、何もしゃべらないのはもっとまずい。「簡単な作業は日本語」というのがベターな方法だと身をもって体験したところである。

彼らとは、ピルクの山奥で、2晩テントで共に寝起きしたが、夕食後のひとときに、星を眺めながらお互いの言葉を教え合っ

て交流したのも懐かしい思い出である。お互いの言葉を全く知らない者同士が、英語を仲立ちにせずにそれぞれの言葉を教え合うなどという経験は得難いものであった。

3つ目は、マンジールのキャンプ地での経験である。このイラン地震の救助のために、ヨーロッパや近隣諸国の多くが救助チームや医療チームを派遣してきたため、キャンプ地に当てられたマンジールの軍隊の敷地は、さながら各国救助隊のオリンピック村のような様子を呈していた。夜になると他の国の救助隊が日本チームのキャンプにもやってきて非公式の情報交換が行われたが、その言葉は、英語はもちろん、フランス語、スペイン語、イタリア語、アラビア語など、様々であった。

びっくりしたのは、たいていの言葉で話しかけられても、外務省、大使館、JICA、随行報道陣などのだれかが、その言葉で受け答えできることで、せいぜい英語くらいしかできない救助チームとしては、非常に頼もしく思うとともに、日本人の国際化も随分進んでいるな、と改めて思った次第である。

以上、国際消防救助隊のイラン派遣の経験を断片的に書き綴ったが、その後、フィリピン、バングラデシュへの派遣が続き、最近ではマレーシアのビル倒壊事故に際しても派遣されており、今後も国際消防救助隊の活躍の場面は増えてくると思われるので、地方自治体の消防官も、英語の修得はもちろん、どのような国に行っても対応できる心構え、必要なノウハウの蓄積や継承などがますます必要になってくると思う。

